

末黒野

すぐろの

7月号 (通巻779号)



彼岸寒

小川玉泉

金色の千木の眩しく竹の秋
携帯の告ぐる余震や彼岸寒
余震なほ九段の花の咲き初むに
戸を繰るや間髪入れず匂鳥

一齊にとはこのことや花開く
投票へ行くにも杖を花曇
花三分夜半の激震嘘のやう
朝 駆 は 二 た 昔 前 花 堤
句会終ふ花暮れのこる川堤
新築のビルを背負へり花の山
三步とはあらぬせせらぎ柳鮓
満開のさくらと競ひけやき萌ゆ

惜春賦

松本三千夫

モンブランのブルーのインク春の宵

風なきにひとひら散るも花万朶

四月十日 河合一雄詩兄七回忌

鎌倉は春歌の橋華の橋

近道の最後は坂や諸葛菜

昼を鳴く三浦城址の蛙かな

春落葉踏むや応ふる山の風

練兵場跡のグランド花水木

稲荷社の狐千体花蘇枋

あたたかや社務所に並ぶ守り札

湖よりも勿忘草や紺ふかく

行く春や竹の葉擦れの音乾き

春惜しむ背山妹山雨募り

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

瀬戸田

黒滝志麻子

向かう岸見ゆる渡船やつばくらめ
動き出しさうな島々風光る
空よりも海の青さやうららかに
初桜島三つ寄る瀬戸田町
欄に白蝶憩ふ耕こう三さん寺じ
春蘭や日の斑明るき寺の径
亀鳴ける夕べ旅情を深うせり
満ち足りし桜の下の不安かな
花畑に海光あふれ島の春
林立の島の起重機夕朧

花

田中臥石

草萌ゆる浜や津波の後始末
みちのくの姉逝き彼岸籠り居る
余震なほ続く春暁海の音
鐘一打磴ゆるやかに花の雲
輪塔へ枝垂桜の影移り
花仰ぎ心の鬱を忘じけり
花の雲風の池畔をたもとほる
心身の震ふ日夜や沈丁花
余震来て舞ふごと脱げり花衣
蟹の家の降らんばかりや雪柳



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

苗木売る 小倉正穂

野に山に色をふやして春の雨
散る花のしばし虜に昼深む
よろこびに哀しみにつけ桜かな
師は天にかたくりの花ひとり見る
苗木売る一つの蕾目玉とし
花冷えや所在なき膝もて余す
一村をすつぽり包み花りんご

夕霞

乙坂きみ子

菜の花や波静かなる海展け
松風の渚にたたむ春日傘
長閑さや人来て出づる渡し舟
門前に月番の札桃の花
繋がれし牛と目の合ひ夕霞
しなやかに闇を抱き込む雪柳
ふるさとに一夜を泊り遠蛙



朝 桜 加藤静江

芽柳や風に光を散らしをり
花びらを文結ふ形に花辛夷
民宿の朝の香や木の芽和
涅槃会や全き月の輝きて
万葉の襲の色や若楓
日当りて目覚むるさまに朝桜
花万朶止む気配なき揺り返し

花の空 菅野蒔子

励しの電話に涙あたたかし
へリコプター梅咲く朝被災地へ
春の月壊れし町をへだてなく
連翹や記憶の糸は炉煙舎へ
乙女椿思ひを七重八重に秘め
耕せる土に音なく滲むる雨
復興の槌音花の空へかな

鳥雲に 菅野日出子

被災地の友の安否や朧月
花萼や地震に崩れし石畳
霾や多摩丘陵の古墳群
聳え立つ多摩の教会鳥雲に
喘ぎ来て彦根の城の花いまだ
山顛に一ト本ともしり山桜
春暁や湖の釣舟影絵めき

猿 島 城戸 緑

猿島は鳶の輪の中かげろへり
降り立ちて要塞跡へ青き踏む
木々芽吹く樹間に仰ぐ白き富士
木の芽風波の穂尖る上に安房
流れ藻や春日巻きこむ潮だまり
桜東風潮の忘れし貝拾ふ
走り根や砲台跡の榛の花

万 仞 集

花 の 冷 え 積 ま れ て 匂 ふ 檜 材	湖 の 霞 に 吸 は れ ハ ー モ ニ カ	嘯 に 足 を 止 む る も 縁 か な	市 歌 洩 る る 丘 の 学 舎 花 明 か り	摘 む ほ ど に 現 れ て 来 る つ く づ く し	夕 日 影 楠 の 若 芽 の 紅 映 ゆ る	震 災 に 停 電 更 に 雪 降 れ り	春 の 雲 影 ゆ つ た り と 千 枚 田	日 に ま み れ 土 の に ほ ひ の 蓬 摘 む	手 紙 書 く 肩 に イ ン コ や あ た た か し
菊 池 善 江	太 田 良 一	新 堀 満 寿 美	竹 内 涼 子	渡 辺 崖 花	木 下 晃	千 葉 恵 美 子	浅 川 幸 代	原 和 三	戸 田 澄 子

春めくと妻を誘ひぬ森の道	柚木澄
春の雹降るや天変地異の昼	鈴木礼子
鶯の頻りを墓の夫とかな	杉本裕子
渡良瀬の葦焼く炎奔りけり	竹村清繁
横浜に巨船来てをり花の昼	内藤庫江
下りきり花のトンネル見返りぬ	清水和子
小雀や笑顔に見ゆる鬼瓦	辻井ミナミ
撫で牛やしだるる梅の香の仄か	岡野里子
昼月に触るるばかりや紫木蓮	小林一榮
犬ふぐり巨人の靴に踏まれけり	福田志津

巨林抄

春愁や故無く返す砂時計	内田 梢
人声も荷を積む船も臙かな	泉 和美
酔ひふかし杜甫の絶句に春惜しみ	今村 千年
わが家にも一花波郷の恋椿	土屋 実郎
在の子も訛り少なし葱坊主	斉藤 マキ子
げんげ田にぽっかり浮かぶ無人駅	庵原 敏典
施錠して又たしかむる朧の夜	倉内 和子
無器用に生きほろ苦き目刺焼く	清水 元子
咲くを愛で散るを風情と桜かな	山崎 幸夫
縄電車とぐる巻きぬる春の昼	細島 孝子
薬や一男一女孫四人	丸山 治男
鴨引きて水面平らになりけり	村田 慶子